

がら若い命を失った戦死者のこと、身の一部分を火葬にし、その遺骨を抱き戦線を共に行軍した戦友のことを私は忘れることができません。

遠い異国の地で果てた友を思い出すと、目頭が熱くなり、手を合わせ、心の中で念仏を唱え、亡き戦友のご冥福を祈ると共に、ご遺族のご健康とご多幸をご祈念申し上げます。私の体験記とする。

## 湘桂作戦

新潟県 長田 栄太郎

中支における湘桂作戦は、日中戦争中最大の大決戦となった。湘桂作戦は粵漢（広東―衡陽―漢口）、湘桂（衡陽―桂林）両鉄道を打通して沿線の米空軍基地をつぶすことであつた。

昭和十九年十二月二日、第三師団（達）は貴州省八塞へ。同月三日、第十三師団（鏡）は独山を占領。いずれも最果ての地貴州省に突入後、反転作戦に入ったが、米

空軍襲来と中国軍の反撃、霧のように忍び来る苗族の恐怖が連続し、多数の死傷者を出した。

日本軍六二万、中国軍三〇〇万は湖南―広西―貴州の各省に転戦した。湘桂作戦の攻撃軍は第十一軍で第三（名古屋）、第十三（仙台）、第三十四（大阪）、第四十（善通寺）、第五十八（熊本）、第六十四（揚州）、第六十八（九江）、第百十六（京都）、第三十七（久留米）および関東軍の第二十七（天津）の各師団で、これに揚子江の海軍の一部および第五空軍の飛行団が協力した。

長沙攻略後は衡陽に攻撃目標は当てられた。第一次攻撃、第二次攻撃を第六十八、第百十六の両師団が行つたが失敗した後、第十三師団と第五十八師団を増援し第三次攻撃をしかけた。衡陽を死守する中国軍を日本軍が包囲し、その日本軍の救援部隊を敵が包囲する戦線は、混乱の極に達した後方も前線もない有様。かつての二〇三高地もこんなだったかと思われるほど凄惨な死闘が、四十七日間も真夏の焼け付くような暑さの中で展開された。一時は「インパール」作戦の二の舞かと憂慮され、第六十八、第百十六の両師団は戦力の七〇％を失った。

衡陽攻略後は第十一軍は、引き続き最大目標である桂林と柳州を攻略目標にし、零陵全県を占領、前人未踏の揺山山脈をあたかも南面を見るような景観の中を、標高一八八〇呎もある細い山道を強行前進をした。地図上にある黄泥江―大石江―埡坪―埡坪峠をたどる。幅一呎から二呎、片側は断崖絶壁、岩山の危険な道の連続であった。

山にはいると豪雨に見舞われ、岩盤が露出した道で馬は次々に足をとられて谷間へ転落する。やむなく砲を兵隊の方がかつぎ馬を助けながら前進する。山越えのため約一〇〇頭の馬が転落した。会津若松歩兵第六十五連隊に配属されている山砲兵第十九連隊第三大隊の苦難の前進ぶりであった。

雨が止めば米空軍のP51の波状攻撃を受ける。人馬の損害日ごとに増大する。さらにコレラが発生し葉もなく病死者が続出した。十二月に独山に突入するも寒気肌を刺す。しかし半袖の夏衣しかなく編上靴の底も剥がれ、後方よりの補給もない。仕方なく草鞋と中国の農民の服を着て、反撃に転ずる中国軍と死闘を繰り返した後、反

転作戦に入る。

第十三師団会津若松歩兵第六十五連隊は湘桂作戦に出発する時の兵力三八〇〇人余りが作戦中七カ月間に戦死九一〇人、警備期間中の死者三九〇人、また多数の将兵が後送された。作戦中に補充された人員二三五三人、警備期間中に四四七人が補充された。敗戦が続く中で湘桂作戦だけが勝ち続けていたのである。

私の第二回目の召集は昭和十九年六月十日、会津若松の歩兵第百五十五連隊であった。全員既教育兵一八六五人でノモンハン、支那事変の歴戦の勇士であったが、部隊に到着したのは八〇〇人余りと、途中戦死または病院に入院後送された人も多い。私が歩兵第六十五連隊に到着したのは十九年八月十六日、衡陽の陥落の直後であった。同月三十日湘桂第二期作戦が始まった。私はこの湘桂作戦で七回紙一重の差で命が助った。紙面の都合でそれを全部書くことが出来ないのです、その一例だけを次ぎに書くことにする。

私は南京より倭団の命令受領者として、倭団と私の第九中隊への命令伝達の任務についていた。私と木村兵長

(福島県)は互いに飯盒炊さんをしあう中であつた。昭和十九年七月二十日の夜、連日の行軍で体がくたくたに疲れ、この日に限って私は飯盒炊さんの時水筒のお湯を沸かさなかつた。これが私の命を救ってくれるとは夢にも知らなかつた。

翌二十一日、倭団は長沙に入るべく日中行軍をした。午前八時ごろ湘江の渡河点で前夜沸かさなかつた水筒のことを思い出し、舟で造つた仮軍橋をわたり河幅三〇〇呎の河の真中で水の補給をし浄水を水筒に入れた。このため私一人が倭団本部より遅れて歩く形となつた。堤防の上にあがつたとき、突然P40二機がエンジンを止めて陵線をすれすれに飛来し、我が倭団本部を見付け落下傘爆弾を投下、銃撃を加えた。私は田圃の中にすぐ逃げ込んで、刈入れ前の稲の中に体をかくした。

爆弾と銃撃をして米機は去つた。急いで現場に行ったところ、そこで見たものはまさに地獄絵図であつた。親兄弟や妻には見せられない。首が吹き飛び、喉よりポンプで血を吸い出すような有様。また大腿部がちぎれ編上靴の先が後向き、内蔵が飛び出し目も当てられない惨状。

戦争の恐ろしさを知つた。

「小隊長殿、分隊長殿」と負傷した兵は泣き声で呼んでいた。戦友の木村兵長も臀部に弾が当たり倒れていた。木村兵長の包帯を取り出して止血をしたが、うまくいかず衛生兵を大声で呼んだ。私はこうして水筒にお湯を沸かさなかつたことが私の命を救ってくれた。この爆撃で戦死一三人、戦傷二六人、馬五頭が死に、倭団本部約六〇人中半分以上が損害を受けた。

母が私の武運長久を毎日祈って氏神様に日参した。この日水筒の水を沸かさない日が、氏神様のお祭りの日であつた。神に護られたことを初めて知つた。

その後幾度か神より護られた不思議なことがあつた。これはまた機会があれば書くことにする。